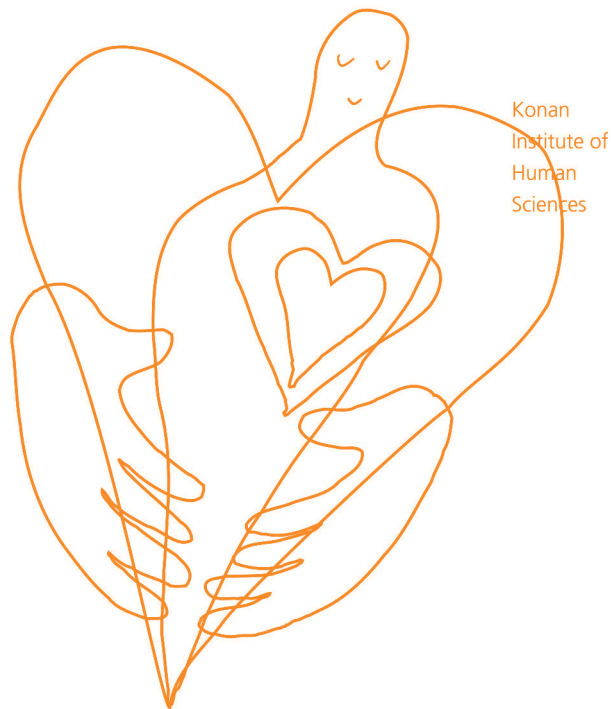




文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査」
—初学者と資格取得後10年の経験者との比較を通して—

報 告 書



2013年3月

甲南大学人間科学研究所
心理療法の現在に関する検証
—臨床と研究の即応的関係の構築—

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査」報告書

目 次

序	1
調査の概要	3
第1章 問題と目的.....	4
第2章 方 法.....	6
第3章 結果と考察－基礎統計－.....	9
第4章 結果と考察－質的分析－	11
第5章 結果と考察－統計的検定－	16
第6章 総合考察	18
おわりに	20
資 料	21
企画・執筆者一覧	26

序

本報告書には、2012年8月に実施された調査研究「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査—初学者と経験者との比較を通して—」の全体像を示すために、その目的・手続き・実施結果と考察が、調査当日に使用した質問紙などの基礎資料とともに収録されている。

この調査は、甲南大学人間科学研究所において2008年度から継続されている文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援採択事業「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」における4つのプロジェクトのうち、「心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的関係の構築—」の一環として共同研究されたものであり、『事例の読み方』に関する調査」としては第2回目となる。

そこで、「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査—初学者と経験者との比較を通して—」の序として、本調査方法の基盤となった『事例の読み方』に関する調査」第1回について述べておきたいと思う。

第1回の調査は、約5年前の2008年春『若手臨床家の事例の読み方』に関する調査」として企画された²⁾。この時は、心理臨床家の事例理解を質的データとして分析するという研究目的のもと、その方法として、ひとつの事例報告に対する心理臨床家それぞれの捉え方や理解のあり方について、実際の臨床素材を使って検討する試みが採用された。

その後、心理臨床家ひとりひとりの事例理解を文字データとして収集する手続きをめぐって、調査メンバーによる議論が重ねられた。今ふり返ると、第1回調査では、方法論として参考になる先行研究がほぼないと言える状況であったために、手続きの立案と精査にかなりの時間をかけた。ここでは、実施に至った『事例の読み方』に関する調査」の手続きについて、調査当日の流れを簡略に記しながら紹介する。

調査当日は、決められた時刻までに、ある一定

数の心理臨床家（以下、調査協力者）が、ひとつの部屋に参集し、講義形式に並べられた机に向かう。調査前半の時間帯は、部屋の前方に着席した事例担当者が、配布資料にもとづいて事例の経過を報告し、調査協力者は同じ資料を見ながら事例を傾聴する。事例報告が終了すると、調査進行係からの「回答を始めてください」という合図で、調査協力者はそれぞれに配布された質問紙を開き、質問項目にそって事例について思索しながら、各々のペースで回答する。予定された回答終了時刻になると調査進行係の合図があり、調査協力者は回答をやめ、調査終了となる。

調査終了後、別室に軽食とともに交流の場が用意され、調査協力者のうち希望者はここで自由に歓談し、調査協力の経験をクールダウンしたり、報告事例について心理臨床家同士の意見交換を行うこともできる。

『事例の読み方』に関する調査」の実施手順は、すでに気づかれた方も多いと思うが、前半は特に、一般的な事例検討会に近い。しかし、この調査では、心理臨床家ひとりひとりの見解を収集するために、事例検討会では慣例である、事例報告者と参加者による質疑応答は行われない。そのことが調査前半と後半で会場の雰囲気を変え、この調査独自の世界を創りだしている。すなわち、調査協力者は、調査前半の時間帯には、事例を一堂に会して聴くことを通して通常の事例検討会のような一体感を、後半の時間帯に入ると、調査協力者は自記式回答に集中しようとするところから、一転して個人の作業場のような雰囲気を経験するのである。

このような調査手続きの立案ともろもろの準備を経て、『事例の読み方』に関する調査」第1回は2009年6月、調査協力者として“若手心理臨床家”30名（臨床心理士資格取得後5～10年）をむかえて実施された。臨床素材としては、スクールカウンセリングの思春期事例の全面接経過を扱った。また、質問項目は次の4つの視点から作成された。

・見立て（初期情報にもとづくアセスメント

と技法の選択)

- 事例の展開（症状や行動、描画や箱庭などの非言語表現、セラピストクライアント関係をどのように読みこんで、面接経過の展開を組み立てるか）
- 身体化・行動化の評価基準（「抱えること」と「抱えられないこと」の境界）
- 連携（関係者とのクライアント情報の共有のあり方）

この第1回目は、甲南大学大学院修了生や現役院生計23名が調査メンバーとして研究に取り組み、その結果については2010年9月日本心理臨床学会第30回秋季大会（於：東北大学）にて発表した³⁾。調査研究の全行程が、大学院在籍時期の異なる先輩と後輩があるひとつの事例をめぐって意見交換を深める機会としても機能し、調査研究であると同時に、貴重な臨床実践研修の場にもなり得たことが非常に印象的である。調査メンバーは、前述した質問項目4つの視点から、グループに分かれて効率的に結果整理や分析をするべく努力したが、メンバーの参集日程調整や研究全体の統括に多大なエネルギーを要した。

第1回調査の実施経験からみえてきた課題をふまえ、『事例の読み方』に関する調査」第2回を実施するにあたって、4つの視点のうち<初期情報からの見立て>に焦点をしばり、本報告書で紹介する「心理臨床家の『事例の読み方』に関する調査—初学者と資格取得後10年の経験者との比較を通して—」というスタイルを

選択するに至ったのである。

註

1) 他の3つのプロジェクトは「加害—被害関係の多角的研究」「育てる関係の危機と子育て意識の多相性に関する研究」「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」である。研究内容の詳細は、甲南大学人間科学研究所のウェブサイト (<http://kihs-konan-univ.org/>) を参照いただきたい。

2) 「若手臨床家の『事例の読み方』に関する調査」中間報告書（調査協力者・同関係者に配布）

3) 以下に発表者と発表演題を記す。

山口修一郎・新道賢一・高島光恵・穂苅千恵（2010）：「見立て」の内実についての研究—“若手臨床家の事例の読み方”に関する調査より

明石加代・長野真奈・甲斐暁子・南部勝彦・倉本幹子・地藏原奈美・廣部愛美（2010）：事例の読み方に関する研究—若手臨床家の読みの視点が生成されるプロセスに注目して

定政由里子・望月昌恵・南野美穂・今関優・立松あゆ子（2010）：スクールカウンセラー（SC）の専門的判断に関する一考察—イレギュラーな要望にSCとして何を感じ、どう対処していくのか

山脇佳代・新道賢一（2010）：心理療法における描画法の導入について—若手臨床家は何を根拠に判断するのか

緑門愉季子・下舞恵・山口修一郎（2010）：夢の報告と描画法を同一面接内で扱うことにおける若手臨床家の臨床的感覚

濱田智崇・川口彰範・宮尾隆行（2010）：事例におけるセラピストの「判断」とその基準をめぐって—若手臨床家の行動化・身体化に対する記述データから

調査の概要

1. 調査の目的

本研究では、臨床事例に限られた初期情報から得られる「見立て」について、心理臨床実践を行う初学者と経験者との比較を行うことで、熟練によって得られるものが何か、かつ見立てる行為がいかなるものかを明らかにすることを目的とする。

2. 調査協力者

経験者：臨床心理士資格取得後10年目の者17名。

初学者：日本臨床心理士資格認定協会が指定する臨床心理士指定大学院を修了し、臨床心理士資格受験資格を有し、平成24年度臨床心理士資格試験受験予定の者20名。

3. 調査協力者の募集方法

経験者：臨床心理士報掲載の名簿からリストを作成し、そのリストを京阪神の日本臨床心理士資格認定協会の指定大学院の教員、臨床心理士の教育・訓練機関に送付し、適任者の推薦を依頼した。後日、推薦された者に調査を依頼した。

初学者：経験者と同様の機関に、適任者の推薦を依頼した。後日、推薦された者に調査を依頼した。

4. 調査方法

調査時期：2012年8月23日

調査手続き：臨床事例の初期情報とその経過を口頭と文書により提示し、質問紙への回答を求めた。事後調査として、質問紙を配布し、後日記入の上、郵送またはメールによる返送を求めた。

調査時間：約105分。

5. 調査内容

当日調査：提示事例の「見立て」（自由記述回答）／個人カウンセリングの平均担当ケース数／理論的オリエンテーション／学生相談経験の有無／フェイス項目

事後調査：見立てに関するイメージ／事例の見立てる行為の変化（経験者のみ）、調査への参加の感想（初学者のみ）

第1章 問題と目的

「見立て」は、精神科医の土居が提唱した概念であるとされる（土居, 1969; 1996）。土居は、当時の精神医学において、診断と治療の分離が著しく、診断が単なる分類のためだけに用いられ、治療に直接貢献しないケースが多いことを批判し、「治療的な診断」を表すものとして、「見立て」という日常語の使用を提案した（土居, 1969）。この「見立て」という考え方は多くの臨床家に受け入れられ、その重要性は精神医学、臨床心理学の領域において繰り返し指摘されてきた（例えば、土居, 1977; 神田橋, 1997; 熊倉, 2003a; 河合, 1992; 溝口, 2003）。

一方で、1980年代以降、精神医学分野では、海外において、DSM や ICD といった「操作的診断」が整備されてきた（松本, 1991）。これらは、精神疾患に関してとりあえず共通言語を作るために作成されてきたものであると言え、現在のところ、「分類のための診断」という側面が強いものである（横山・飯田, 1996）。操作的診断は、精神疾患の研究を強力に推進する点で意義のあるものだが、DSM-IV-TR の序章においても指摘されているとおり、「料理の本」のように扱われる可能性もあり（American Psychiatric Association, 2000）、その用い方について留意せずに臨床実践の場に流入してくることの問題もしばしば指摘されている（例えば、姉齒, 2001; 熊倉, 2003b; 内海, 2005）。このような現状に鑑みれば、「見立て」という言葉の持つ価値は、現在も失われるものではないだろう。

「操作的診断」では、障害 (disorder) が操作的に明確に定義されるのに対し、「見立て」は、医学的な症状や疾患に限定されない、多様な意味が含蓄されるあいまいな概念のままとされてきた。「見立て」という概念が明確化されてこなかったのは、土居 (1996) が、見立てという日常語を用いたことについて、「折々に変化する流動的な印象を与えることが大変好都合なのである」と述べていることからわかるとおり、見立てという概念の与える「流動的な印象」が、

「見立て」という概念が援助的に機能する要因として感得されていたためであろうと推測される。そして、専門家としての見立ての習熟に関しては、事例検討・スーパービジョンといった訓練の重要性が強調されてきた（例えば、土居, 1969; 馬場, 1996）。では、「見立て」の技術は、習熟の過程でどのように洗練されていくのだろうか。

広く専門家の習熟ということに関して言えば、心理療法のプロセスと効果に関する研究において、心理臨床家自身の個人的要因が心理療法の効果に与える影響の重要性について研究されてきている（Beutler, Crago, & Arizmendi, 1986; Beutler, Machado, & Neufeldt, 1994; 岩壁, 2007; Orlinsky, Grawe, & Parks, 1994; Orlinsky & Howard, 1986）。また、心理臨床家は、個人としての経験、継続的な訓練、臨床経験を積むことによって職業的に成長・変化していく（Skovholt & Ronnestad, 1995）と考えられており、熟練した心理臨床家と初心の心理臨床家の違いに関する研究もなされている（Brammer, 1997; Hillerbrand & Claiborn 1990; O'Byrne & Goodyear 1997; 武島ら 1993）。しかし、土居の言う「見立て」の技術が成熟していく過程は、その概念のあいまいさもあって、いまだ十分な知見が集積されていると言い難い。心理臨床家が、現場での研鑽を経て、実際にどのような「見立て」の方法を身につけていくのかを明らかにすることは、臨床心理士の専門性の一端を示すとともに、心理臨床家の訓練において、どのような目標を定め、どのような方法を準備すべきかの指針ともなる重要な知見である。

本研究では、大学院を修了し、臨床心理士資格を受験する以前の心理臨床家と、臨床心理士資格取得後10年目の心理臨床家の「見立て」を比較することで、熟練によって身につけられるものを浮き彫りにするとともに、見立てるといふ行為がいかなるものなのかを明らかにする。

引用文献

- American Psychiatric Association (2000): *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fourth Edition Text Revision* 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸(訳)(2002): DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院
- 姉齒一彦(2001): 精神疾患治療ガイドラインの非マクドナルド化へ向けて—エクリチュールと主体の関係から 精神神経学雑誌 103, 49-53.
- 馬場禮子(1996): 見立ての訓練—臨床心理士の場合 精神療法 22(2), 133-136
- Beutler, L. E., Crago, M., & Arizmendi, T. G. (1986): Research on therapist variables in psychotherapy. In S. L. Garfield & A. E. Bergin (Eds.): *Handbook of psychotherapy and behavior change (3rd ed.)* (pp. 257-310). New York: Wiley.
- Beutler, L. E., Machado, P. P. P., & Neufeldt, S. A. (1994): Therapist variables. In A. E. Bergin & S. L. Garfield (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change (4th ed.)* (pp. 229-269). New York: Wiley.
- Brammer, R. (1997): Case conceptualization strategies: The relationship between psychologists' experience levels, academic training, and mode of clinical inquiry. *Educational Psychology Review*, 9, 333-351.
- 土居健郎(1969): 「見立て」について 精神医学 11(12), 2-3.
- 土居健郎(1977): 方法としての面接 医学書院
- 土居健郎(1996): 「見立て」の問題性 精神療法 22(2), 118-124.
- Hillerbrand, E., & Claiborn, C. D. (1990): Examining reasoning skill differences between expert and novice counselors. *Journal of Counseling and Development*, 68, 684-691.
- 岩壁茂(2007): 心理療法・失敗例の臨床研究—その予防と治療関係の立て直し方 金剛出版
- 神田橋條治(1997): 対話精神療法初心者への手引き 花クリニック
- 河合隼雄(1992): 心理療法序説 岩波書店
- 熊倉伸宏(2003a): (追補版) 面接法 新興医学出版
- 熊倉伸宏(2003b): 精神疾患の面接法 新興医学出版
- 松本雅彦(1991): 精神医学的診断基準 臨床心理学 2, 29-63.
- 溝口純二(2003): 臨床心理面接演習 I—個人臨床心理学全書 第4巻 下山晴彦(編): 臨床心理学実習論第5章 pp.179-221.
- O'Byrne, K. R., & Goodyear, R. K. (1997): Client assessment by novice and expert psychologists: A comparison of strategies. *Educational Psychology Review*, 9, 267-278.
- Orlinsky, D. E., Grawe, K., & Parks, B. K. (1994): Process and outcome in psychotherapy—Noch einmal. In A. E. Bergin & S. L. Garfield (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change (4th ed.)* (pp. 270-376). New York: Wiley.
- Orlinsky, D. E., & Howard, K. I. (1986): Process and outcome in psychotherapy. In S. L. Garfield & A. E. Bergin (Eds.), *Handbook of psychotherapy and behavior change (3rd ed.)* (pp. 311-381). New York: Wiley.
- Skovholt, T. M., & Rønnestad, M. H. (1995): *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. Chichester, West Sussex, UK: Wiley.
- 武島あゆみ・杉若弘子・西村良二・山本麻子・上里一郎(1993): 精神療法における臨床経験年数と治療者の行動・態度 カウンセリング研究 26, 97-106.
- 内海健(2005): 精神科臨床とは何か 星和書店
- 横山知行・飯田眞(1996): 操作的診断基準と治療的見立て 精神療法 22(2), 158-166.

第2章 方法

1. 調査協力者

①経験者の募集 2012年度が臨床心理士資格取得後10年目にあたる臨床心理士番号を有する者（以下、「経験者」とする）を、臨床心理士報掲載の名簿から抜粋し、経験者のリストを作成した。次に、京阪神圏内の臨床心理士を養成している日本臨床心理士資格認定協会の指定大学院の教員、及び、スーパーバイズ等の臨床心理士の教育・訓練に携わっている機関に、調査の趣旨を説明して名簿を送付し、経験者の調査協力者として適任と考えられる者の推薦を依頼した。

②初学者の募集 臨床心理士指定大学院を修了し、2012年度の臨床心理士資格試験の受験予定者（以下、「初学者」とする）で、初学者の調査協力者として適任と考えられる者の推薦を、経験者と同様の機関に依頼した。後日、推薦を依頼した機関から挙げられた調査協力者候補者に、調査の目的や内容を改めて説明し、直接調査依頼を行った。その結果、経験者17名、初学者20名の協力が得られた。

2. 調査手続き

(1) 提示事例の作成

調査者の一人が実際に担当した臨床事例を提示事例とした。提示事例については、臨床心理士有資格者7名（うち2名は大学教員やスーパーバイザーとして臨床家の教育・訓練に従事した経験がある）によって、調査素材として妥当かどうか検討された。具体的には、心理臨床家の見立てを問う上で面接事例として適切な経過を経ているか、事例経過の資料として十分な情報が含まれているか、個人情報保護の観点から調査で提示する情報として妥当かどうか等の観点から精査を行った。

(2) 提示事例の概要

提示事例は、ある大学の学生相談室で実際に行われた19才女性Aさんの事例を用いた。5回

目の来談時までには得られた情報を、調査協力者が追体験しやすいよう、時間経過に沿って提示した。提示した情報の概要は以下の通りである。

#1 クライアント（以下、「Cl.」とする）が心理検査を受けたいと学生相談室に初来室し、心理検査を施行した。

#2 追加の心理検査施行と検査結果のフィードバックを行った。

#3~5 #2の終了時にCl.が継続面接を希望し、以後通常のカウンセリングを実施した。

#1および#2で施行した心理検査は、Y-G性格検査、バウムテスト、TAT（図版3枚）であり、Y-G性格検査についてはプロフィールを、バウムテストおよびTATについては検査時のCl.の反応を提示した。また、#3の情報については、実際に事例を担当したカウンセラーが再現できる範囲での逐語記録を提示した。#4,5は、記録から抜粋した情報を提示した。

(3) 調査の実施

2012年8月に、B大学にて調査を実施した。調査当日は、調査協力者全員に、事例の情報を書面で配布・提示し、実際に当該事例を担当した臨床心理士が資料を読み上げた。その後、105分の時間をとって、「提示された内容から、あなたはこの事例をどのように見立てますか。できるだけ詳しくお書き下さい。」と教示し、当該事例に対する「見立て」を自由記述してもらった。自由記述にあたっては、希望する調査協力者はパソコンを用いて回答することを認めた。回答にパソコンを使用した者は、初学者3名、経験者7名であった（表1）。また、105分で記述が終了しなかった調査協力者については、15分の時間延長を認めた。

見立てに関する回答の終了後、質問紙への回答を求めた。調査内容は、「性別」、「年齢」、「個人カウンセリングまたは個人心理療法の従事の有無」、「個人カウンセリングや個人心理療法の1週間の平均担当ケース数」、「主要な理論

的オリエンテーション」、「学生相談の経験の有無」、「学生相談の実務年数」であった。なお、主要な理論的オリエンテーションは、日本臨床心理士会が実施している「臨床心理士の動向ならびに意識調査」（日本臨床心理士会，2011）に準じて、調査項目を設定した。

表1 調査の回答方法による人数の内訳

	手書き	パソコン入力
初学者	17名	3名
経験者	10名	7名
計	27名	10名

(4) 事後調査の実施

次に、『見立て』という言葉が示す内容についてのイメージと、経験者には『見立て』の立て方の初学者と現在の比較について、初学者には「調査に参加した感想」を自由記述で回答を求めた。これらの調査内容は、調査協力者の調査への負担を考慮し、後日に調査用紙に記入の上、返送してもらう形をとった。その結果、初学者については13名（回収率65.0%）、経験者については17名（回収率100.0%）の回答が得られた。なお、事後調査の結果については、巻末資料にて記載する。

3. 倫理的配慮

本調査で使用した提示事例は、CI. より研究使用に関する同意を得ている。また、提示事例は個人が特定できないように、事例情報を損なわぬ範囲で情報の加工を行った。

調査協力者には、調査実施前に調査の趣旨および調査実施に関する倫理的配慮を口頭と文書で説明したのち、調査同意書に署名をお願いした。なお、調査は無記名とし、回収は回収用封筒を用いるなど、個人が特定できないように配慮した。

4. 分析方法

(1) 見立てる行為に関する仮説モデルの分析

得られた回答は、句点ごとに切片化した。句

点の無い文章については、記述内容が示す意味内容に応じて一文、もしくは内容ごとに切片化した。その結果、723の切片が得られた。それらの切片について、臨床心理士資格をもつ調査者のうち5名により、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を参考に分析を行った。具体的な分析手続きは以下の通りである。

- ①まず、各切片を構成するプロパティとディメンションを抽出した。プロパティとはデータの意味内容を示す視点であり、ディメンションはその視点から見たときの範囲となる（戈木クレイグヒル，2006）。例えば、「彼女の木は単調で、一本線で描かれており、あまり迷いが感じられない。」という切片に対して、プロパティを「文章の性質」とし、ディメンションとして「心理検査の特徴の記述」、「受ける印象」のように抽出した。このように切片に対して、複数のプロパティとディメンションを抽出していった。
- ②プロパティとディメンションをもとに、切片の内容を適切に表現するラベルをつけた。なお、この各切片にラベル付けを行う作業と並行して、ラベル付けが各切片を適切に言い表しているかの検討を相互に行う中で、調査者のうち5名の合意に基づくラベル分類に関する規則を作成した。最終的には、調査者のうち1名がラベル付けに関する規則に従い、すべての切片にラベル名をつけ、別の2名がラベル名の適切性について判定を行った。その結果、3名の評定者間一致率は96.6%であった。一致しなかったデータについては、3名の評定者間で協議の上、最も妥当であると判断したラベル名へと再分類した。
- ③意味内容が類似するラベルを統合して、カテゴリを作成した。
- ④カテゴリ同士やラベル間の関連性について、回答データに照らし合わせて、カテゴリやラベル同士の関連づけを行った。
- ⑤以上の分析からカテゴリ関連図を抽出し、

見立てる行為に関する仮説モデルを生成した。

(2)「今後の展望」に関する質的分析

見立てる行為に関する仮説モデルの分析において得られたカテゴリーの一つである「今後の展望」について、記述内容の質的な差異をみるために、「面接の中で何に取り組むかがイメージされているか」という視点から、初学者と経験者の比較を行った。具体的には、「今後の展望」に該当する切片について、調査者のうち3名の臨床心理士資格取得者が独立に「イメージされている」、「ややイメージされている」、「あまりイメージされていない」、「イメージされていない」の4件法で評定を行った。なお、心理検査の施行および他職種との連携について述べられた切片については、具体的な対応とみなせるが、

両者とも心理臨床家が面接で取り組むものと次元が異なるものと考えられ、「イメージされていない」と評定することとした。次に、「イメージされている」と「ややイメージされている」を「イメージあり」に、「イメージされていない」と「あまりイメージされていない」を「イメージなし」に評定をまとめた。評定の結果、評定者間一致率は78.7%（一致した切片数は85）であった。不一致の文章については、評定者3名間で協議し、判定を確定した。

引用文献

- 戈木クレイグヒル滋子 (2006)：ワードマップ グラウンデッド・セオリー・アプローチ—理論を生み出すまで 新曜社
- 日本臨床心理士会 (2011)：「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書

第3章 結果と考察 —基礎統計—

調査協力者の属性

本調査の調査協力者の属性については、表2に示す。調査協力者は経験者17名であり、初学者20名であった。性別は、経験者では男性3名(17.6%)、女性14名(82.4%)、初学者では男性6名(30.0%)、女性14名(70.0%)であり、いずれも女性が大半を占めた。「臨床心理士の動向ならびに意識調査」では、臨床心理士の男女の分布について、男性23.1%、女性76.8%と

いう結果を示しており(日本臨床心理士会, 2011)、本調査において女性の調査協力者が多くを占めたことは母集団を反映した結果といえよう。

調査協力者の年齢は、経験者では「36—40歳」が11名(64.7%)と最も多く、次いで「31—35歳」2名(11.8%)、「41—45歳」2名(11.8%)の順に多かった。初学者では、「25歳以下」が15名(75.0%)と最も多く、次いで「31—35歳」

表2 調査協力者の属性

初学者		経験者	
	人数 (%)		人数 (%)
調査協力者の性別		調査協力者の性別	
男性	6(30.0)	男性	3(17.6)
女性	14(70.0)	女性	14(82.4)
調査協力者の年齢		調査協力者の年齢	
25歳以下	15(75.0)	31~35	2(11.8)
26~30	2(10.0)	36~40	11(64.7)
31~35	3(15.0)	41~45	2(11.8)
		46~50	1(5.9)
		51~55	1(5.9)
個人カウンセリングへの従事		個人カウンセリングへの従事	
あり	15(75.0)	あり	15(88.2)
なし	5(25.0)	なし	2(11.8)
カウンセリングの平均担当ケース数		カウンセリングの平均担当ケース数	
月1ケース	1(6.7)	週8ケース	4(26.7)
隔週1ケース	1(6.7)	週9ケース	1(6.7)
週2ケース	2(13.3)	週10ケース	1(6.7)
週3ケース	5(33.3)	週11ケース	1(6.7)
週4ケース	1(6.7)	週12ケース	3(20.0)
週5ケース	2(13.3)	週15ケース	2(13.3)
週8ケース	1(6.7)	週16ケース	1(6.7)
週12ケース	2(13.3)	週17ケース	1(6.7)
		週20ケース	1(6.7)
オリエンテーション ¹⁾		オリエンテーション	
人間性心理学	4(18.2)	人間性心理学	1(5.9)
精神分析・分析心理学	8(36.4)	精神分析・分析心理学	9(52.9)
行動療法・認知行動療法	3(13.6)	行動療法・認知行動療法	0(0.0)
統合派・折衷派	7(31.8)	統合派・折衷派	7(41.2)
学生相談の経験		学生相談の経験	
あり	3(15.0)	あり	5(29.4)
なし	17(85.0)	なし	12(70.6)
学生相談の経験年数		学生相談の経験年数	
5ヶ月	1(33.3)	1年	1(20.0)
1年	2(66.7)	4年	1(20.0)
		9年	1(20.0)
		10年	2(40.0)

註1) 複数回答がみられるため、全体は100%を超える

が3名(15.0%)の順に多かった。

現在、個人カウンセリングあるいは心理療法に従事しているかの有無については、経験者のうち15名(88.2%)が、初学者のうち15名(75.0%)が、個人カウンセリングか個人心理療法に従事していた。また、それらに従事している者の内、週に担当しているケース数の平均をみると、経験者は週8～15の担当ケースが12名(80.0%)であり、週20の担当ケースをもつ者もみられた。それに対して、初学者では月1回から週5の担当ケースが12名(80.0%)であり、総じて経験者よりも平均担当ケース数は少なかった。

主要な理論的オリエンテーションについては、経験者では「精神分析的・分析心理学的アプローチ」が9名(52.9%)で最も多く、次いで「統合的・折衷的アプローチ」が7名(41.2%)が多かった。なお、経験者では「行動療法・認知行動療法的アプローチ」と、「システムアプローチ」はみられなかった。初学者では、同じく「精神分析的・分析心理学的アプローチ」が8名(36.4%)と最も多く、次いで「統合的・折衷的アプローチ」7名(31.8%)、「人間性心理学的アプローチ」4名(18.2%)、「行動療法的・

認知行動療法的アプローチ」3名(13.6%)の順に多かった。なお、初学者においては「システムアプローチ」と回答したものはみられなかった。経験者と初学者のオリエンテーションに多少の差異がみられるが、「精神分析的・分析心理学的アプローチ」および「統合的・折衷的アプローチ」が多くを占める点は共通していた。

学生相談に関する臨床経験があるかどうかの有無については、「経験なし」と回答した者は、経験者12名(70.6%)、初学者17名(85.0%)であり、多くの調査協力者は学生相談に関する臨床経験をもっていなかった。それに対して、「経験あり」と回答したものは、経験者5名(29.4%)、初学者3名(15.0%)であった。そのうち学生相談に関する経験年数については、経験者では1年、4年と1名ずつみられ、9年から10年と経験年数の長い者は2名みられた。初学者については、5ヶ月が1名、1年が2名であり、学生相談に関する経験年数は経験者に比べて短かった。

引用文献

日本臨床心理士会(2011):「臨床心理士の動向ならびに意識調査」報告書

第4章 結果と考察 一質的分析一

グラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析により得られたカテゴリとラベルの詳細は以下の通りである（表3）。

1. 現在・過去のクライアントに対する着目と意味づけ

収集された切片のうち、現在および過去のCI.について述べられた切片を「読み手の関与の仕方」という点から評定し、「記述」、「諒解」、「推測」、「解釈」、「評価」という5つのラベル名をつけた。それらをまとめて、「現在・過去のCI.に対する着目と意味づけ」というカテゴリ名をつけた（全部で544個の切片が該当）。ラベルの判定にあたっては、当該切片に書かれている内容が、提示された事例情報に含まれている情報であるかを逐一確認することで、読み手の推量や意味づけの度合いを判断した。個々のラベルの内容と具体例は次の通りである。

①記述 提示された個々の情報を要約して記したり、そこから読み手が受けた印象をそのまま記したものである（105個の切片が該当）。

ex.「対人関係においては高校時代の友人との出来事が中心に話されている。」

②諒解 個々の情報について、提示された情報の範囲で、読み手による意味づけと理解が行われているものである（94個の切片が該当）。

ex.「また、感情表現も“ゾッとした”“もやもやする”など未熟なもので、自分の感情をしっかりとらえ言語化することが難しい感じが感じられた。」

③推測 事例に記載されていない情報（主に、CI.の現実的状況や、過去の状態に関すること）について、想像や推測により、CI.に関する情報を補っているものである（53個の切片が該当）。

ex.「親からの承認が少なく、また、気分により、無視されたり、あるいは暴力でと衝動的関わりのため、常に親の言動には過敏にならざるを得ず、安心してすごせる感覚も乏しかったか。」

④解釈 個々の情報に関して、読み手が積極的に意味づけを行い、主にCI.の心理的な状態や心理機制に関する推量や理解をしているものである（236個の切片が該当）。

ex.「自分のすごさをひけらかすような派手な子への拒絶感、また別の幼稚で人目を怖がる子へのアレルギー反応は、ある面では、Aさんが自分の中の受け入れがたい側面を投影性同一視しているようなところもあるのではないかと考えられる。」

⑤評価 事例で提示された個々の情報の意味づけに留まらずに、CI.を総合的に判定しているものである（56個の切片が該当）。

ex.「病態水準としては、神経症水準、もしくはそれよりも軽いと思われる。」

2. 今後の展望

未来のことについて言及した切片は、内容によって、「CI.の課題」、「留意点」、「方針」、「カウンセリングの効果」、「展開の予測」という5つのラベル名をつけた。それらをまとめて、「今後の展望」というカテゴリ名をつけた（全部で108個の切片が該当）。個々のラベルの内容と具体例は次の通りである。

①CI.の課題 CI.にとっての今後の課題について言及したものである（6個の切片が該当）。

ex.「その際最も大切なことは、このCIが、世界と関わるための自分なりの通路を見出すということであると考えられる。」

②留意点 面接を継続していくにあたって、カウンセラーが留意していくことや注意する点に言及したものである（17個の切片が該当）。

ex.「#5の発言とCIの年齢から、統合失調症への配慮は必要である。」

③方針 今後の面接方針を述べたものである（43個の切片が該当）。

ex.「しんどさに十分に寄り添ってもらえない体験が実生活で出てきた場合は、特にその傷つきや迫害感に十分共感し、語りの中

表3 グラウンデッド・セオリー・アプローチによって得られたカテゴリとラベルの詳細

カテゴリ	ラベル	内容	具体例
現在・過去のCI.に対する着目と意味づけ	記述	事例で提示された個々の情報を要約したり、読み手が受けた印象をそのまま記している	「対人関係においては高校時代の友人との出来事が中心に話されている。」「Aさんの発言は、やや共感しにくく、事実関係が読み取りにくい。」
	諒解	事例で提示された個々の情報に対して、提示された情報の範囲で、読み手による意味づけと理解が行われている	「また、既に述べたように両親の幼さは、Aが現実的で有効な対人関係の作り方や対処の仕方を身につけることを阻害してきたと思われる。」「また、感情表現も“ゾットした”“もやもやする”など未熟なもので、自分の感情をしっかりとらえ言語化することが難しい様子が感じられた。」
	推測	事例で提示されていない情報について、想像や推測により、CI.に関する情報を補っている	「親からの承認が少なく、また、気分により、無視されたり、あるいは暴力での衝動的関わりのため、常に親の言動には過敏にならざるを得ず、安心してすごせる感覚も乏しかったか。」「中学のときAさんは自分を持っていたと言うが、高校に入ってこの子と出会い、一気に取りつくろって来ていたものが、取りつくろえなくなった印象を受ける。」
	解釈	事例で提示された個々の情報に関して、読み手が積極的に意味づけを行い、主に、CI.の心理的な状態に関する推量や理解をしている	「親子関係では、威圧的な父親像に対し母親像はほとんど語られておらず、バウム下方の空白からも、母子関係の希薄さや基本的信頼感のなさが読み取れる。」「自分のすごさをひけらかすような派手な子への拒絶感、また別の幼稚で人目を怖がる子へのアレルギー反応は、ある面では、Aさんが自分の中の受け入れがたい側面を投影性同一視しているようなところもあるのではないかと考えられる。」
	評価	事例で提示された個々の情報への意味づけに留まらずに、CI.を総合的に判定している	「病態水準としては、神経症水準、もしくはそれよりも軽いと思われる。」「対人関係に傷つきを抱えてきた青年期女性。」
今後の展望	CI.の課題	CI.にとっての今後の課題について言及している	「その際最も大切なことは、このCI.が、世界と関わるための自分なりの通路を見出すということであると考えられる。」「流行りをいいと思う一方で、そこに飲みこまれると自分というのが発揮できなくなるのではという揺れを生きているようであり、正に自分形成の問題が核となるであろう。」
	留意点	面接を継続していくにあたって、カウンセラーが留意していくことや注意する点に言及している	「#5の発言とCI.の年齢から、統合失調症への配慮は必要である。」「今後、男性イメージということにも注目しながら会っていききたい。」
	方針	今後の面接の方針について述べている	「状態やテーマが深くなるようであれば、必要に応じて親面接の可能性も考えたい。」「しんどさに十分に寄り添ってもらえない体験が実生活で出てきた場合は、特にその傷つきや迫害感に十分共感し、語りの中で扱ってゆくことが望まれる。」
	カウンセリングの効果	カウンセリングがどのような効果を持つのかを述べている	「不安定で、いつ敵になるかわからないような世界を生きてきたCI.にとって安定した面接の枠（決まった場所と時間）、やいつでも変わらずCI.の気持ちを受容してくれるCoの存在は、CI.にとってとても治療的に働くと考えられる。」「今までの感情と密接した反応から一歩引いた、客観的な立場に自分を置くことが可能になる事で、自分自身で、対人行動や自身の感情に対する対応法を見つけ出す力はあるだろう。」
	展開の予測	今後、事例がどのように展開していくか言及している	「対人距離が近く主観的に解釈しがちなので、時に被害的になり、関係妄想的になることが危惧される。」「Coと共に、自分の内面の動きを感じながら、何故、自分がさみしかったのか、自分が親や友人に何を求め、何を得られなかったのか、ふり返る作業がおこなわれるかもしれない。」
気になる点	気になる点	事例を読んでいて、気になった点や疑問点が書かれている	「なぜAさんは、無理やりにも苦痛を見つけ不安になろうとするのか。」「(思春期の課題ともつながる)同性である母親との関係がどうであったのか？」
理論・一般論	理論・一般論	事例の情報とは直接関係のない理論や一般論が書かれている	「本来、主体性の未分化な状態は家族の中で分化して行くものである。」「現代のメール文化が必要以上にCI.に「怖さ」を与えていることは否めない。」
その他		上に当てはまらないもの	

で扱ってゆくことが望まれる。」

④カウンセリングの効果 カウンセリングがどのような効果を持つのかを述べたものである(7個の切片が該当)。

ex.「不安定で、いつ敵になるかわからないような世界を生きてきたCIにとって安定した面接の枠(決まった場所と時間)やいつでも変わらずCIの気持ちを受容してくれるCoの存在は、CIにとってとても治療的に働くと考えられる。」

⑤展開の予測 今後、事例がどのように展開していくかの言及をしたものである(35個の切片が該当)。

ex.「Coと共に、自分の内面の動きを感じながら、何故、自分がさみしかったのか、自分が親や友人に何を求め、何を得られなかったのか、ふり返る作業がおこなわれるかもしれない。」

3. 気になる点

少数だが、事例を読んで気になった点や、疑問点に言及した文章があった。それらについては、「気になる点」というラベル名をつけた(8個の切片が該当)。

ex.「(思春期の課題ともつながる)同性である母親との関係がどうであったのか?」

4. 理論・一般論

事例の情報とは直接関係の無い、理論や一般論を述べている文章も散見された。これについては、「理論・一般論」というラベル名をつけた。なお、一般論というのは、事例を理解するために参照されている文章であるが、理論とはし難いような切片(例えば、現代のメール文化について言及した切片や、CIの語る体感を理解する際、どういう時そういう体感が生じるかについて言及した切片)が分類された。

ex.「本来、主体性の未分化な状態は家族の中で分化して行くものである。」

5. その他

その他、自由記述を読みやすくするための「見出し」や、事例を読んだ上での「読み手の感想」、調査者あてのコメントである「調査者に対するメッセージ」のようなラベル名もつけたが、これらについては、「その他」という扱いにして、今回は分析の対象とはしていない。

6. 見立てる行為に関する仮説モデル

以上のようなラベル・カテゴリは、それぞれ見立ての過程の一部が顕現したものと考え、ラベル・カテゴリ間の関連について調査者間で検討を行い、**図1**のような関連図を、「見立て」の過程の仮説モデルとして提示した。

図1の仮説モデルでは、事例情報を提示された調査協力者に、「気になる点」が生じ、そこから個々の情報について、得られた情報を意味づける動き(「記述」、「諒解」、「解釈」へと向かう動き)と、提示されていない情報へ着目する動き(「記述」、「推測」へと向かう動き)の2方向の流れが生じると仮定した。

「記述」は、ここに着目したという意味を持つものであり、CIをどのように「諒解」「解釈」したかを述べる前提の情報として書かれていると考えられる切片もあれば、記述自体がすでにCIの理解にそのままつながるような切片もあった(ex.「CIは自分の破壊的な対人関係に関して家族が原因である、ということ面接の中でちらほら語っている。」。この「記述」では、情報の不在に言及する切片もあった(ex.「そして相手がどのように考えているか等の発言は一切見られない。」)。

「諒解」は、提示された情報に対して、意味づけが行われるものであるが、あくまで提示された情報に沿う、提示された情報の範囲を逸脱しない形の理解をするものである。その意味で、「記述」と「解釈」の中間に存在するものとした。

「解釈」は、得られた情報に対し、積極的に意味を付与するものであるが、この際、事例情報のみではなく、「理論・一般論」を借用して

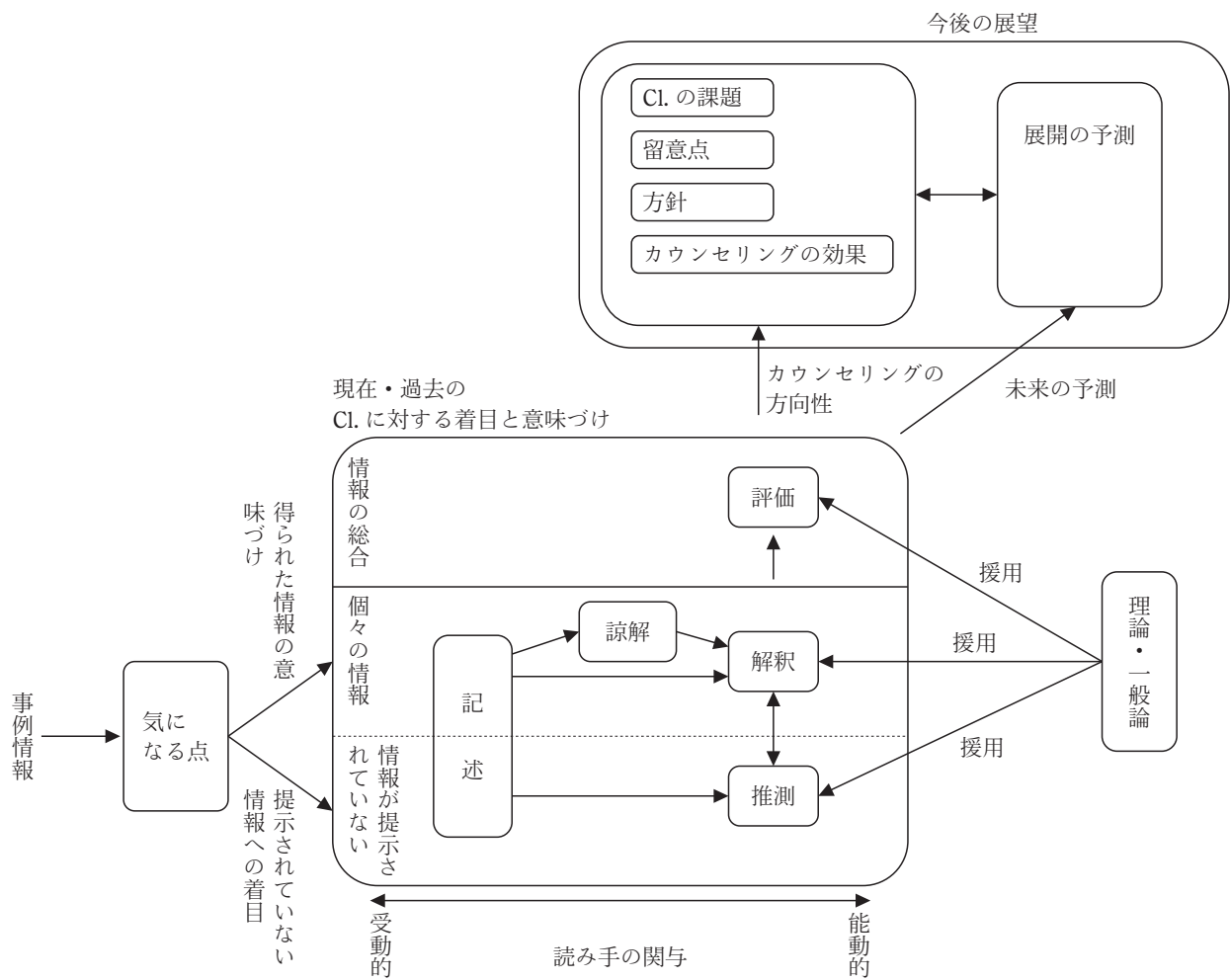


図1 見立てる行為に関する仮説モデル図

解釈が行われていると仮定した。

これら「記述」「諒解」「解釈」は、すべて提示された情報への着目及び意味づけであるが、情報への関わり方が受動的か能動的か、事例情報に対し理論や一般論を援用して意味を付与しているか否か、というところから区別される。なお、「記述」から「諒解」及び「解釈」への矢印、ならびに「諒解」から「解釈」への矢印は、「見立て」の経過を考えた時に、提示された情報を理解していく流れとして、このような順に進む場合があり得るであろうということを表したものである。

「推測」は、不在の情報に対し、積極的に想像を働かせ、足りない情報を補おうとする動きであるが、特に過去のCI.の家族環境やCI.の状態に対して推量を行っている切片が散見された。これは、調査協力者に、精神分析的・分析心理学的アプローチの者が多かったことから、

CI.の心理状態を理解する際に、CI.の過去の（親子関係を含む）対人関係への推測が行われやすかったことの影響も考えられる。その意味で、「推測」についても、理論・一般論からの援用が行われていると考えられるとともに、CI.の心理状態や心理機制についての「解釈」と密接に関連するものとも考えられ、「解釈」と「推測」には、双方向の動きを仮定した。

「評価」は、CI.の病態水準や、CI.が端的にどのような問題を持つのかを述べたものや、カウンセリングがCI.にどのような効果を及ぼすかのような、情報を総合して、なんらかの評価へと結びついているものである。個々の意味づけられた情報を総合して行われていると考えられるため、「解釈」からの流れを仮定した。また、これについても、理論等からの援用により理解がなされていると仮定した。

以上に述べてきたような、「現在・過去のCI.

に対する着目と意味づけ」を土台にして、最終的には、「今後の展望」が生じるものであらうと考えられるが、「今後の展望」のうち、「方針」、「留意点」、「CI.の課題」、「カウンセリングの効果」は、未来のことについて述べてはいるが、現在のCI.の総合的な「評価」に近いものが含まれるのに対し、「展開の予測」は、全くの未来を予測・予言する文章であり、両者には性質の違いがあると考え、両方向への動きを仮定している。この、「方針」「留意点」「CI.の課題」「カウンセリングの効果」は、当然、描かれた未来である「展開の予測」からの影響を受けるであらうし、逆に、「展望の予測」は、「方針」「留意点」「CI.の課題」「カウンセリングの効果」とも関連する内容であると考えたため、やはり双方向の流れを仮定した。参考に、仮説モデル図の典型例として、ある調査協力者の記述を以下に抜粋して記載する。

「まず、Aの親子関係から焦点をあてて考えてみると、Aは『親の言うことを実行してきた』と話すように小さい頃から、自分の意志よりも親の意見によって生きてきたように思われる。」(推測)

「TATの結果からもカード1について『親にさせられ生きがいを感じられずに悩む』子どもと表出している。」(記述)

「また、その一方では、「楽しそうに見せないとダメなのかなと悩んでいる」自分の感情を表に出せないでいる葛藤も見られる。」(諒解)

「幼少期から親の意見にそって生きてきたA

は『殴ってしまえ』という父親の言葉の通りに、疑いを持たずにその通りの行動に出てしまうと話している。」(記述)

「その行動にはA自身の主体性が見られず、自身の感情や気持ちよりも行動として表出していることがうかがえる。」(解釈)

「また、Aの話す友人関係等からも、事象について述べられている部分がほとんどで、『裏切られる』『ゾッとする』等の大変に主観的な部分が表れている。」(諒解)

「そして相手がどのように考えているか等の発言は一切見られない。」(記述)

「これらのことから、Aは、自身の感情や相手の気持ち等、その時々における内省がうまく出来ないと考えられ、今現在もその整理がついておらず、混乱が起きている状況であると考えられる。」(解釈)

「その為、面接の中では、順に整理をしていく際には、その時々Aの感情や相手の気持ちや考え等を取り入れながら話を進めていく必要があると思われる。」(方針)

「また#3には『一人っ子だからさみしい』と話しており、これまでそういった感情を話す機会がなかったであらうAにとっては、そのことについて十分に受け入れてもらえる存在があることでも立ち止まったり落ち着けることができる様に思われる。」(カウンセリングの効果)

「十分な共感と受け入れがあることで、感情や気持ちに焦点が当てられるようになるのではないだろうか。」(展開の予測)

第5章 結果と考察 —統計的検定—

1. 見立ての文章量に関する比較

見立ての文章量を初学者と経験者とで比較するために、収集された経験者と初学者の自由記述の文章数及び文字数を算出した。初学者の文章数の平均は15.9個 ($SD=5.0$)、文字数の平均は1011.3文字 ($SD=282.7$) に対し、経験者の文章数の平均は23.8個 ($SD=6.9$)、文字数の平均は1509.4文字 ($SD=512.3$) であった。パソコンによる入力の影響も含めて検定するために、経験(初学者-経験者)と、入力方法(パソコン-手書き)の2要因を従属変数とし、文章数または文字数を独立変数とする分散分析をそれぞれ行った(表4)。その結果、文章数については、経験および入力方法の両主効果が有意であり ($F(1, 33)=4.9, p<.05$; $F(1, 33)=18.0, p<.001$)、交互作用は認められなかった。文字数については、経験および入力方法の両主効果が有意であり ($F(1, 33)=10.7, p<.01$; $F(1, 33)=42.9, p<.001$)、交互作用が認められた ($F(1, 33)=4.3, p<.05$)。

このことは、「見立て」の自由記述において、経験者の方が自由記述すべき内容を豊富に有していたことを示唆すると考えられる。特に、パソコンによる入力が手書きによる入力速度の限界を補うものであると考えれば、文字数において「経験」と「入力方法」の交互作用が認められたことは、初学者が経験者ほど自由記述する内容を多く有していないため、パソコンを用いて入力した初学者では、パソコンを用いて入力

した経験者ほど文字数が多くならないことを反映しているのではないかと推測される。

次に、以上に示した文章量の差が、どのような内容の文章において経験者と初学者間で差があるのかを検討するために、「1. グラウンデッド・セオリー・アプローチによる理論の作成」で示されたラベル毎の文章数を算出して、ラベル毎に、経験者と初学者間で、Mann-WhitneyのU検定を行った(表5)。その結果、いずれのラベルにおいても、統計的な有意差は認められなかったものの、「諒解」「解釈」「事例の展開についての予測」について、いずれも経験者においてラベル数の多い傾向が認められた。

今回の結果からは、経験の差によってそれぞれのラベル数に差があるとまでは言えなかったが、経験者は初学者に比べて、事例を読んで理解する際に、「諒解」「解釈」という行為をより多く行っている可能性が示唆された。また、事例の展開についての予測をより多く行っている可能性も示唆された。

2. 「今後の展望」の具体性に関する比較

調査協力者の「今後の展望」に関する自由記述に、面接の中で何に取り組むのかについて、「イメージあり」と判定されたものが含まれているか否かで、クロス集計表を作成した(表6)。カイ2乗分析を行ったところ、経験者は初学者に比べて「イメージあり」と判定される比率が有意に多かった ($df=1, \chi^2=5.5, p<.05$)。こ

表4 経験×入力法別平均文章数および平均文字数 (SD) の分散分析結果

	初学者		経験者		主効果		交互作用
	手書き	パソコン入力	手書き	パソコン入力	経験	入力法	
N	17	3	10	7			
文章数	14.4 (5.0)	24.3 (11.4)	19.3 (6.2)	30.4 (6.8)	4.9 *	18.0 ***	0.1
文字数	929.2 (298.5)	1476.7 (603.3)	1074.0 (195.8)	2131.4 (320.9)	10.7 **	42.9 ***	4.3 *

*** $p<.001$, ** $p<.01$, $p<.05$

表5 経験者-初学者間のラベルの中央値とU検定分析結果

カテゴリ	ラベル	初学者	経験者	p 値
気になる点	気になる点	0	0	
現在・過去のCI. に対する着目や意味づけ	記述	2	2	p<.10
	諒解	2	3	
	推測	0.5	1	p<.10
	解釈	5	6	
	評価	1	1	
今後の展望	カウンセリングの適応・効果	0	0	
	今後の留意点	0	0	
	CI. の今後の課題	0	0	
	今後の方針	0	1	
	事例の展開についての予測	0	1	p<.10
理論・一般論	理論・一般論	0	0	

表6 面接で取り組む内容のイメージの有無と経験の有無によるクロス集計表

	イメージあり	イメージなし
経験者	14	3
初学者	9	11
計	23	14

表7 面接で取り組むことのイメージの有無の具体例

	イメージなし	イメージあり
カウンセリングの適応・効果	該当なし	カウンセラーとの対話を通じて、これまでの体験を捉え直していく中で、物事を客観的に捉えることが少しずつできてくるようになれば、対人関係にいい影響がみられるのではないと思われる。
今後の留意点	家庭について、両親が仲がいいことは、子どもにとって、すごく幸福感につながるはずなのに、CI にとっては、幸福感につながることはなかった、ということとは、大事なポイントとなるかもしれない。	該当なし
CI. の今後の課題	根が描かれていないこと、樹幹の中の幹、枝が未分化であること、「実」が描かれなかったこと、などが今後の課題となる点ではないかと思われる。	該当なし
今後の方針	描写されているCI 像からは、今すぐの喫緊の問題ではないように感じられるが、必要が出れば医療機関（投薬）の利用もどこかで想定しておくことも望ましい。	カウンセリングを通して、少しずつ自身に対する客観的視点を育て、過去の体験のワークスルーを行い、今は過去に固着している本人の視点をこれからに向けていくような援助が必要であろう。
事例の展開についての予測	今後、自身の女性性の獲得で困難さを感じていくことが予測される。	TAT の物語や夢などのイメージは、現実寄りの印象があるので、今後異性関係などから、力で抑えようとする父親との関係や自身の抱える暴力性などがテーマとしてあがってくることも視野に入れながら、しばらくはこれまでの親子関係や友人関係などの語りを丁寧に傾聴し、大学生活への適応という現実的サポートを目指す体制が適切かと思われる。

れは、見立てに関して、経験者の方が、面接の中で取り扱っていくことについて、より明確なイメージを持ち得ることを表していると考えられる。「イメージなし」が経験者に少ないことは、心理臨床の経験を積むことで、面接で行う実際を想像し、その見通しを持つことができることを表しているのかもしれない。なお、表7

に「今後の展望」のラベルで「イメージあり」あるいは「イメージなし」と評定されたものを具体例として挙げる。特に、「今後の方針」と「事例の展開についての予測」において顕著であるが、「イメージあり」と評定されたものは、面接で実際に取り組む内容に具体性が伴っているといえるだろう。

第6章 総合考察

1. 経験によって得られる見立ての内実

見立てる行為に関する仮説モデル図(図1)で示したとおり、事例情報に接した心理臨床家に「気になる点」が生じ、そこから、「得られた情報の意味づけ」と、「提示されていない情報への着目」との、2方向の動きが生じる。前者の動きでは、CI.に関する個々の情報が、「記述」、「諒解」、「解釈」という、読み手の関与の仕方が異なる行為によって意味づけられ、後者では、「記述」、「推測」という形で、不在の情報に着目したり、不在の情報を補ったりすることが行われる。このうち、「推測」や「解釈」については、事例情報からやや離れた形でCI.を理解する行為であり、「理論・一般論」といったものの援用により行われているのだと考えられる。個々の情報に対する意味づけが、やはり、「理論・一般論」を援用しつつ総合され、「評価」となる。これらのCI.の情報に対する意味づけを土台に、最終的に、「CI.の課題」「留意点」「方針」「カウンセリングの効果」といった、カウンセリングの方向性を打ち出す動きと、「展開の予測」という、未来がどうなるかを予測する動きとが生じ、「今後の展望」が生み出されるものと考えられる。以上の結果と、第5章の統計的分析の結果と合わせて、経験者と初学者の「見立て」について、次のような違いが考えられる。

まず、文章数・文字数の違いからわかるとおり、経験者は、「見立て」の自由記述量が、初学者に比べ多いが、これは、「見立ての過程の仮説モデル」における図式により考えると、事例情報から得られる情報と、「理論・一般論」から得られる情報と、両方において、経験者の方が豊富であった可能性が示唆される。経験者が事例理解の際、理論的枠組みの使用に精通していることは当然のこととも言えるが、事例の情報に関しては、初学者、経験者双方に、同じ事例情報が提示されているのだから、事例情報を活用し、有意義なものを見出す過程に、初学

者、経験者間の差があると考えられる。

そう考えると、有意差は認められなかったものの、「諒解」という切片の数について、経験者が初学者よりも、より多い傾向にあったことは注目に値する。すなわち、「事例情報」に提示された範囲で、得られた情報を意味づけようとする点に、初学者と経験者間に差があるのではないだろうか。

初学者の「解釈」の切片が経験者よりも少ない傾向にあった理由のひとつとして、「解釈」については、初学者が「理論」を十分に蓄積しておらず、理解の際に活用するのが難しいことが影響しているとも考えられるが、事例情報と「解釈」の途上に、「諒解」という意味づけの仕方がありと仮定すれば、「諒解」の差が、そのまま「解釈」の差に影響を与えた可能性も考えられる。

「今後の展望」のカテゴリにおいては、「展開の予測」において、切片の数が、経験者の方が初学者よりも多い傾向にあった。このことは、経験者が、初学者に比べ、事例の経過がどのようになるかを予測した上で、将来に対する対応や方向性を導き出す傾向が示されている可能性が考えられる。言い換えれば、初学者は、現在のみから一方向的に未来の対応を考えて展望を生み出す傾向が強いのに対し、経験者は、まず、現在から近い将来の予測をし、そこから立ち返って、事例の展望を生み出している可能性が示唆される。今回の調査では、そのような経験者の、近い将来の予測を可能としているものについては、はっきりと示すことができなかった。しかしながら、恐らく経験者は、これまでに経験してきた事例情報と、提示された事例情報とを照合し、何かしらの類似性を見出し、事例に不足している情報を補っていくことで、近い将来の具体的な展望を描くことが可能となるのではないかと推測される。

また、「面接の中で何に取り組むのかがイメージされているか」という観点から検定した結果

は、経験者と初学者で明確な差が認められた。初学者が近い将来を具体的に見通して、どのような面接を行っていくのかをイメージすることの難しさが反映されているものと考えられる。

以上のことから、あくまで仮説であるが、経験によって得られる「見立て」の内実とは、①事例に沿う形で情報を意味づける点、②得られた情報を理論等を用いて意味づける点、③近い未来を予測しそこから対応等を案出する点、④面接での具体的な対応をイメージして描き出す点にその特徴があることが、示されたのではないだろうか。

2. 今後の課題

今回の調査では、グラウンデッド・セオリー・アプローチの手法を援用し、自由記述にラベル名を命名する際に、信頼性を確保する手続きとして、ラベル分類に関する規則を作成し、調査

者間の合意によりラベル名を確定させていった。しかし、独立に命名して一致度を見る厳密な形式での信頼性は担保されていない。特に、ラベル名のうち、矢印でつながっているラベル間では、それぞれの間で、各ラベルの中間に位置すると考えられるような切片もあるため、判定の精度をあげることは今後の課題として残された。また、今回、統計的な検定を行うには、標本数が少なかったとも考えられるため、安定した検定結果を得るために、サンプル数を増やして検討することも課題として残されている。

調査自体の限界として、経験の違いではなく、何らかの世代の違い自体が反映されている可能性は残っている。また、調査協力者の属性において、初学者と経験者間で、若干のオリエンテーションの違いが認められたことから、それが結果に反映されている可能性もある。今後更なる検討が必要であろう。

おわりに

本報告書は、甲南大学人間科学研究所が2008年度から文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成事業の助成を受け、「心の危機の見極めと実践的ネットワークの創造」というテーマの下に行った共同研究のうちの一つ、プロジェクト4「心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的關係の構築—」のなかで2012年度に実施した調査とその結果についてまとめたものです。

21世紀の今日、子育て、教育、医療、福祉、司法など、さまざまな領域で人々の抱える心の危機はかつてない様相を呈し、私たちは心の専門家として、それぞれの現場で今日的な必要に応じた実践を提供し、それらに基づいた新たな心の支援の理論的構築を行うことを求められています。ここ10年、臨床心理士をはじめとする心の専門家の実践領域は急激に拡大し、心の治療・回復を目指す営みから、広く個々人の生き方の質の向上を目指す営みまでを含み、社会から解決を期待される課題も複雑化・多様化しました。

そのようななかで、私たちが見失わずに持ち続けるべき専門性の共通の核とはどんなものか、心理臨床の本質とは何か、そして社会の要請に応えるために新たに獲得しなければならない視点は何なのか。本プロジェクトは、こういった大きな問題意識を背景に持ち、さまざまな実践の事例研究や心理臨床家による議論を重ねてきました。さらに、客観的資料に基づいた議論の端緒を開くために実施したのが、2度の調査です。それぞれ、一定の臨床経験年数の心理臨床家（と訓練生）にお集まりいただき、同じ事例の情報から何をどのように見立てるのかという切り口を主に用いて、現場に生きる心の専門家が、熟練とともに持つようになる共通の視点、理解、展望を抽出することを試みました。

本報告書は、2度目の調査結果についてのものですが、得られた記述資料の質的分析から導き出されたのは、心理臨床家が事例を見立てていくときのプロセスには共通の道筋があり、着目点に対する自身の内的な諒解と、学んできた心理学の理論や人生経験から得た法則などを擦り合せながら、総合的な事例の評価を導き出した上にその後の展望を描く、というモデル仮説でした。また、最初の着目点に大きな違いはないものの、現場での経験年数が増すと、情報を自分のもつ枠組みのなかで意味づける記述が豊かになり、その後についてはより具体的な対応の指針や課題の設定が行えるようになることも示唆されました。詳細な分析はまだ残されていますが、ここから言えるのは、やはり心理臨床家として求められる熟練の力は現場での実践とともに培われていくこと、そして現場は異なっても共有される視点はあるということでしょう。

本調査は、中堅と若手の心理臨床家である研究員数名によって、企画から実施、分析まで主体的に進められました。そのこと自体も、本プロジェクトの趣旨にかなう、意義のある試みであったと思います。次世代を担う心理臨床家が受身ではなく、自分たちの将来あるべき方向を積極的に模索するこのような研究が、さまざまな形で継続されていくことを期待しています。最後になりましたが、本調査にご協力くださった方々、ならびにご紹介の労を取ってくださったご指導の先生方に感謝を申し上げます。

2013年2月

甲南大学文学部教授 高石 恭子

資 料

調査後アンケート結果のまとめ

調査後アンケートは、調査当日の事例資料とともに配布した。全7問で構成され、問1から問5までは調査が行われた後に記入してもらい、当日に回収した。この結果は、「第3章 結果と考察—基礎統計」として本報告書にまとめた。問6、7に関しては後日記入の上、郵送またはメールによる返信を求めた。なお、調査当日は調査後に交流会を設けた。初学者と経験者が混ざるように6グループに分かれ、それぞれにスタッフが1名ずつ加わり、本調査に参加した感想などが話された。

以下に、本アンケートの〔問6〕〔問7〕に関する代表的な記述を挙げ、結果のまとめとする。

〔問6〕 本調査の回答にあたって、「見立て」という言葉が指す内容について、どのようなものをイメージしましたか？ 自由にご記入ください。

●初学者の記述

- CIについて過去の出来事、家族関係、生育歴、心理査定から浮かびあがるパーソナリティ像等をまとめて、総合的に今のCIの状態像を理解し、支援する方向性の手助けとなるようなものを想像した。
- 事例として提示された方が、これまでどんな環境の中で、どんなふうに他者とやりとりをして、どう時間を過ごして来られたか、それが今とどうつながっているのか、という過去を踏まえて、何を主訴としてこられているのか、今どのような状態なのかという現状把握と、それからお会いしていくにあたってどのような方向性で進んでいけばいいかの道しるべのようなものが「見立て」なのではないかと考えながら回答しました。
- CI.自身が持っている・生きている世界観や生育歴などを含めて、CI.が抱えている悩み

はCI.にとってどんな意味があるのかという“仮説”をCI.の語りや描画、夢等のイメージを通してTh.が感じ、思い、考えたものをもとに構築していくこと。さらに、その見立てから、今Th.はこのCI.にとって何をすべきなのか、CI.に必要な事は何なのか、CI.のニーズは何なのかを考え、どういう方針で会っていくのか考え、そして、実際会うなかで、仮説を作っては解体し、作っては…を繰り返していくこと。

- 初学者だからか、クライアントから得られた断片的な情報から、一定の整合性を持った臨床像を描き、支援の方法を提案するということが、森の中に足を踏み込むようなイメージがあります。

●経験者の記述

- クライアントの訴え、症状、対人関係、おかれている状況、生きてきた歴史などから状態を把握し、どのような支援、配慮が必要かを考え、実際に行った支援の評価を行うこと。
- その人の考え方、人との関係、コミュニケーションのとり方、出来事に対する対処・対応のとり方などの思考・行動のパターンを分析し、その人のもつパターンが、どんなふう形成、獲得されていったのかについて、それまでの生育歴や家族構成などと照らし合わせます。その人のもつ内面的な課題や、現状の生活で生じているであろう、周囲との齟齬や、摩擦について想定した上で、改めて、その人が挙げた主訴と照らし合わせてみます。
- 精神医学の知識から客観的に見立てを立てるという方向に傾きすぎるのではなく、クライアントの持っている困難さ、心の動きなどを心理検査や夢、面接などでクライアントが語っている事柄を通し、Th.の主観の経験などを交えて、捉えていくことだとイメージしました。
- 臨床家として自身が本人に関わる際の態度、

言動、雰囲気、意識的な部分のみならず、体感や無意識的なところを含め、できうる限りでモニターしておくこと。

見立てをたてるときに着目する点は、初学者と経験者との間で大きな違いは見られなかったが、経験者は、さらにそこに自身の主観や経験を用いて見立てていく印象であった。

とりわけ初学者の記述では、情報を意味づけ、まとめ上げる難しさについて述べられていた。

〔問7〕 調査に参加した感想を、自由にご記述ください。(初学者対象)

- “見立て”といわれた時に、どこから考えていけば良いのか、どう組み立てていくべきか悩みました。
- 書いているうちに思い浮かんでくることが出てきたり、事例の内容から、これはどういうことなんだろうと疑問に思うことが出てきたりと、文章にまとめることがなかなか上手くいかなかったです。
- (交流会に参加して) 文章の中で主語が明確でなく話の流れが分からない箇所がありましたが、先輩方はその曖昧さの中で複数の仮説を立て「こうかもしれない」「もしこうであれば」と、ご自身の頭の中で対話されていたそうです(括弧は報告者による)。
- 一つの方向でしか見れていないから、経験のある人ならもっと多面的に見ているのだろうなと思いました。

初学者においては、調査への緊張や疲れとともに、見立てる難しさを感じた者が多かった。加えて、見立てをたてる際の経験者との違いを考えさせられたという記述も見られた。

〔問7〕 あなたの見立てのたて方について「臨床心理士資格取得直後」と「現在」を比べてみたとき、思い浮かぶことはありますか。自由にご記入ください。(経験者対象)

- 初期の頃は、習いたての概念や考え方に画一的にあてはめてしまっているような感じがあったが、現在は、今まで学んだ概念や考え方が前面に出てこなくなり、あてはめていくということがなくなってきたように思います。そして、自身の経験や主観を通したうえで、論理的に見立てを組み立てるといったことをするようになった点では違いが出て来たように思います。
- 一つの具体的なやりとりやエピソードが色々な角度から見るとたくさんの意味をもっており、それを全体のアセスメントと、どのようにつなげ、他から出てきたアセスメントと比較してその仮説を捨てたり、強化したり、ということ、事例を重ねている分、多層的に展開できるようになった、という感じです。
- 見立てを考える時の「いやな経験、否定的な感情、ネガティブな部分をかかえつつもその人が一番その人らしい、過ごせる、生きる力を発揮していける道筋を、ねらいとしていこう」という思いは、現在までの経験を通して培われたように思います。
- 資格取得後の方が、感覚的には瑞々しさやビビッドさを保っていたところもあったように思う。

経験者は、臨床心理士資格取得直後と比べて、事例に沿いながら、自身の経験や、より多角的な視点を持ってCI.を理解するようになったと感じていることが窺えた。

その一方で、経験を積むことにより薄れたものがあると感じた者もいた。

整理番号

調査後アンケート

<記入用紙>

提示された内容から、あなたはこの事例をどのように見立てますか。できるだけ詳しくお書き下さい。

「心理臨床家の‘事例の読み方’に関する調査－初学者と資格取得後 10 年の経験者との比較を通して－」にて回答くださった内容を検討するにあたって、お尋ねしたいことがあります。

問1～問5については、ご記入の上、**お帰りまでに、係の者にご提出下さい。**
 問6、問7については、お渡しした返信用の封筒にて、**2012年9月10日(月)までに**ご返送下さい。メールで回答をご返送いただいてもかまいません。

返送先

宛先： 甲南大学人間科学研究所
 プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」事務局

住所： 〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

メールアドレス： kihs.psych2012@gmail.com

なお、皆様からのご回答は、回答者が特定されない形で整理させていただきます。どうぞ、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」 関係者一同

※回答方法

問1～問5については、該当するものに○をつけてください。

() 内には簡略に追加情報を記入してください。

問6、問7については、自由記述です。記入欄の中に記述してください。

問4、問7については、経験者と初学者とで設問が異なるので、ご注意ください。

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

整理番号

問1. あなたの性別

- ① 男 ② 女

問2. あなたの年齢

- ① 25歳以下 ② 26歳～30歳 ③ 31歳～35歳
 ④ 36歳～40歳 ⑤ 41歳～45歳 ⑥ 46歳～50歳
 ⑦ 51歳～55歳 ⑧ 56歳～60歳 ⑨ 60歳以上

問3. 現在、個人カウンセリングあるいは個人心理療法を行っていますか。
 (親面接やブレインセラピーを含む。)

- ① はい ② いいえ

→ ①「はい」と答えた方にお尋ねします。

1週間に、平均して何ケース担当していますか。() ケース

問4. 主要な理論的オリエンテーションをひとつ選んでください。
 経験者の方：臨床心理士としての現在の主たる理論的オリエンテーション
 初学者の方：これまで主に学んできた理論的オリエンテーション

- ① 人間性心理学的アプローチ ② 精神分析的・分析心理学的アプローチ
 ③ 行動療法的・認知行動療法的アプローチ ④ システムアプローチ
 ⑤ 統合的・折衷的アプローチ ⑥ その他()

問5. 学生相談の経験はありますか。

- ① ある ② ない

→ ①「ある」と答えた方にお尋ねします。

学生相談の実務経験は、何年ですか。 () 年

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

整理番号

問6・問7に回答いただくにあたって

記入方法： 手書きあるいはPC入力、都合のよい方法をお選びください。

i) 手書きの場合

手書き用回答用紙(4～5頁)に直接ご記入ください。

ii) PCで入力する場合

書式は自由ですが、回答用紙左上にある整理番号と、問番号を忘れずに記入してください。

返送方法： 郵送あるいはメールにて9月10日(月)必着でご返送ください。

i) 郵送の場合

返送用封筒(返送先記入済)に回答用紙を入れてご返送ください。

ii) メールによる返送の場合

返送時の表題を「調査後アンケート」として、甲南大学人間科学研究所「心理療法の現在に関する検証」事務局(kihs.psy@knu.ac.jp)宛に送信してください。

なお、メール返送の場合は、差出アドレスを通して回答者が特定されることをご承知おきください。

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

整理番号

回答用紙（9月10日必着で返送）

問6. 本調査の回答にあたって、「見立て」という言葉が指す内容について、どのようなものをイメージしましたか？自由にご記入ください。

整理番号

回答用紙（9月10日必着で返送）

問7. ※経験者と初学者とで設問が異なります。

経験者の方：

あなたの見立てのたて方について「臨床心理士資格取得直後」と「現在」を比べてみたとき、思い浮かぶことはありますか。自由にご記入ください。

初学者の方：

調査に参加した感想を、自由にご記述ください。

※PCで回答を作成し、電子メールで返送の場合は、この回答用紙左上にある整理番号と、問番号を忘れずに記入してください。

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

※PCで回答を作成し、電子メールで返送の場合は、この回答用紙左上にある整理番号と、問番号を忘れずに記入してください。

プロジェクト「心理療法の現在に関する検証」

企画・執筆者一覧

企画者 高石 恭子 (甲南大学文学部教授／学生相談室専任相談員)*

企画者 穂苅 千恵 (山王教育研究所 臨床心理士)**
担当 序

調査実施責任者 山口修一朗 (かささぎ心理相談室 臨床心理士)**
担当 1、4、5、6 章

定政由里子 (関西リハビリテーション病院 臨床心理士)**
担当 4、6 章

倉本 幹子 (神戸市スクールカウンセラー)
担当 4 章、資料 (調査後アンケート結果のまとめ)

山根 隆宏 (甲南大学人間科学研究所 博士研究員)
担当 2、3、5 章

地蔵原奈美 (甲南大学人間科学研究所 リサーチアシスタント)
担当 4 章、資料 (調査後アンケート結果のまとめ)

* は人間科学研究所兼任研究員

** は人間科学研究所客員研究員